



Title	芥川龍之介「西方の人」(12悪魔)の解釈に就いて
Author(s)	小澤, 保博
Citation	琉球大学教育学部紀要 第一部・第二部(48): 287-292
Issue Date	1996-03
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/976
Rights	

芥川龍之介「西方の人」(12悪魔)の解釈に就いて

小澤保博

Critical Stance in R. Akutagawa's The Man in the West Reading "12 an evil spirit"

Yasuhiro OZAWA*
(Received October 31, 1995)

(1)

最初に芥川龍之介「西方の人」(12「悪魔」)の全文を引用する。

〈キリストは四十日の断食をした後、目のあたりに悪魔と問答した。我々も悪魔と問答する為には何等かの断食を必要としてゐる。我々の或ものはこの問答の中に悪魔の誘惑に負けるであらう。又或ものは誘惑に負けずに我々自身を守るであらう。しかし我々は一生を通じて悪魔と問答をしないこともあるのである。キリストは第一にパンを斥けた。が、「パンのみでは生きられない」と云ふ注釈を施すのを忘れなかった。それから彼自身の力を持めと云ふ悪魔の理想主義的忠告を斥けた。しかし又「主たる汝の神を試みてはならぬ」と云ふ弁証法を用意してゐた。最後に「世界の国々とその栄華と」を斥けた。それはパンを斥けたのと或は同じことのやうに見えるであらう。しかしパンを斥けたのは現実的の欲望を斥けたのに過ぎない。キリストはこの第三の答の中に我々自身の中に絶えることのない、あらゆる地上の夢を斥けたのである。この論理以上の論理的決闘はキリストの勝利に違ひなかった。ヤコブの天使と組み合ったのも恐らくはかう云ふ決闘だったであらう。悪魔は畢にキリストの前に頭を垂れるより他はなかった。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかった。この悪魔との問答はいつか重大な意味を与へられてゐる。が、キリスト

の一生では必しも大事件と云ふことは出来ない。彼は彼の一生の中に何度も「サタンよ、退け」と言った。現に彼の伝記作者の一人、ルカはこの事件を記した後、「悪魔この試み皆畢りて暫く彼を離れたり」とつけ加へてゐる。〉

芥川龍之介は、キリストの一生の中でも有名なエピソードの一つである「荒れ野での試み」(マタイ4-1…11、マルコ1-12…13、ルカ4-1…13)に就いて、「この悪魔との問答はいつか重大な意味を与へられてゐる。が、キリストの一生では必しも大事件と云ふことは出来ない。」と記述し、解説を付け加えた。

この「荒れ野での試み」に就いて、「いつか重大な意味を与へられている」と記した時、芥川の脳裏にあったのは、おそらく「カラマゾフの兄弟」の中の一挿話、次男イワン、カラマゾフが弟の三男アリョーシャ、カラマゾフに語って聞かせる作中劇「大審問官」であったと思われる。(芥川が早くから「カラマゾフの兄弟」に就いて理解を示していた事は初期の作品「蜘蛛の糸」の素材を「カラマゾフの兄弟」の中の一挿話「一本の葱」から得ている事によって推測し得るであろう。)

「大審問官」の主題は、人間の生活に就いての問題で、それは精神の自由によって確立されるべきであるか、それとも外部の権威によって保証されるべきであるのか、という問いなのである。この重大な問題に就いて芥川が「キリストの一生では必ずしも大事件と云ふことは出来ない」と記述

* Department of Japanese Language,
college of Education,
University of the Ryukyus.

した事は、特筆すべき事のように思える。

「西方の人」は、予言的な色彩の濃い作品であり、磯田光一はこの作品の内部に芥川死後の昭和文学全体に対する眺望を読み取ろうとした。（「西方の人」再読－芥川龍之介の時代感覚、「ユリイカ」昭和48、12）

この「荒れ野での試み」に就いて、キリスト自身の人生上の個人的な問題の範囲で片付けた芥川の思考は、今日では大正作家の社会的視野の狭さを感じさせ、また人間の精神に対する洞察力の不足をも認識させる。

芥川龍之介より十歳若い竹山道雄「焼跡の審問官」（『新潮』昭和23、5）、小林秀雄「カラマゾフの兄弟」（『文芸』昭和16…17）は、それぞれこの「大審問官」の問題に就いて切実にそして執拗に追及している。20世紀の悲劇の原因となった国家社会主義そして共産主義の基盤になる思想に就いて芥川は、キリスト自身の私生活上の問題として処理した。芥川死後の昭和の動乱の元凶に就いて作家としての芥川の視野は狭かったと言えるであろう。磯田光一の「西方の人」に就いての見解は、芥川龍之介の思考の浅薄さに就いて認識していない。

ギリシャ正教とロシア神秘主義に対して知識と認識の不足を実感した小林秀雄は、途中でドストエフスキに就いての研究そのものを放棄した。「カラマゾフの兄弟」そのものに就いての認識を示す事は、私の能力の範囲外であるので以下「大審問官」の問題に就いて竹山道雄、小林秀雄の思考の足跡を辿りながら私自身の見解を示したい。

(2)

〈爰にイエス御霊によりて荒野に導かれ給ふ、悪魔に試みられんと為るなり。四十日、四十夜、断食して、後に飢ゑたまふ。試むる者きたりて言ふ『なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ』答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る』と録されたり』

ここに悪魔イエスを聖なる都につれてゆき、宮の頂上に立たせて言ふ、『なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの為に御

使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支え、その足を石に當つること勿らしめん』と録されたり』イエス言ひたまふ『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』

悪魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの国と、その栄華とを示して言ふ、『なんぢ若し平伏して我を拝せば、此等を皆なんぢに與へん』爰にイエス言ひ給ふ『サタンよ、退け「主なる汝の神を拝し、ただ之にのみ事へ奉るべし」と録されたるなり』ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち来り事へぬ。〉

（「マタイ伝」4-1…11）

悪魔との問答の第一は、「なんぢ若し神の子ならば、命じて此等の石をパンと為らしめよ」「人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る」である。

精神の自由か、それとも物欲かという二者選択に於いてパンを退け精神の自由を掲げたのは、若い夢想家としてのキリストの人生へのあるいは人間の欲望に対する無知によると見做す事で大審問官は、物欲肯定の立場を優先させずして精神の自由など存在し得ないとキリストを弾劾する。精神の自由を説いて天国への道を示したイエスの王国は、ローマ帝国のコンスタンチヌス帝により国教になり地上の権力と結びついた。

しかし、イエスの名に於いて存続する千年王国もやがて精神の自由よりも、物欲を肯定する者により打倒される時が来るに違いないと予言する。（イワン、カラマゾフの作中劇「大審問官」は、舞台を16世紀の異教徒殲滅の激しかったスペインに借りている）

イワン、カラマゾフの創作した作中劇は、来るべき国家社会主義あるいは共産主義社会を予言しているようである。大審問官は、やがてヒトラー、あるいはレーニンという実在の人物として歴史に登場して来る事になるのである。

大審問官によれば人間は、精神の自由を失いパンを与えられただけでは十分に幸福になれない。地上の権力者により権威によってパンは与えられなくてはならず、人間の自由な良心は地上の権力者によって奪われこそ初めて人間は、不安や葛藤という人間精神の動揺から解き放たれる。人間の幸福は、各自の精神の自由を奪い、自由な良心の

活動を破壊する事によってもたらされる。国家社会主義、共産主義の違いはパンの分配の方法論の違いであり、人類史上最大限の犠牲者をだした先の独ソ戦争は、大審問官同士の宗教戦争として認識し得る事が可能であろう。

(3)

悪魔との問答の第二は、『なんぢ若し神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの為に御使たちに命じ給はん、彼ら手にて汝を支え、その足を石にうち當つること勿らしめん」と録されたるなり』

「主なる汝の神を試むべからず」と、また録されたり』

イエスは、「あなたの神、主を試みてはならない」という理由で、自己の持っている奇跡と復活という神秘を行使する事なく、全ての決断を人間の良心の自由判断に任せたのである。人間は、奇跡と復活という神秘体験を経験する事で自己の存在を超えた権威を実感する事が出来、そうして自ら実感した権威の前に屈服し、隷属する事で精神の不安や魂の動揺から解放され幸福感を得る事が出来るというのに。イエスは、一般大衆を容易に屈服させる事の出来得る奇跡を行使する事無く、各人がそれぞれ自分の自由意志によってイエスを求め、天国の門を叩く事を求めたのである。

イエスは、人間の精神を高く評価し人間性の高貴なことを各人に期待したのである。おそらくそこには、若い肉体と強固な精神的意志を持ったイエス自身の姿の投影があるであろう。つまりイエスは、選ばれた自己の姿を周囲の一般大衆に投影させる事で人間の能力を過大評価したのである。この結果、人間は自己の存在を根底から支えてくれる巨大な権威を喪失し、一般大衆の多くは天国の門を叩く事が出来なくなった。各人は寄る辺の無い魂を虚空に漂わせ日々不安の時間を生きる事になったのである。

この問題は、民族全体に就いてもまた個人に就いても今日有効な示唆を与えてくれている。自己の存在を超えた神秘的な権威を背後に持った民族は、国民一人一人は幸福なはずであり、一体化した民族の集団的な行為の内部に個人の意志と苦悩

は昇華しあるいは吸収されているはずである。自由な行為とその結果としての責任を個人の問題に帰している民主主義の国に就いてこそ一人一人の苦悩は、より深く深刻かも知れない。

比較的厳格な規律の高い高校生活を送ってきた者が、大学進学後に目標を失った瞬間、精神は緩み、肉体は弛緩して毎日不安に苛まれ、無限の空間と無制限の時間の流れの内部にあって精神に変調を来し、魂はそのあるべき場所を失い、苦悩に苛まれる例は夥しい。こうした病んだ若者の精神を救済する方法は簡単で、人工的な権威のもとに特殊なカルト集団の一員として日常生活を営ませる事である。

国家社会主義あるいは共産主義の人類の負の遺産を有効利用し、病んだ精神の再生を図るべきかも知れない。宗教団体であれ、政治団体であれ、外界の一般情報を遮断し、長期間離島等に於いて何等かの権威のもとに思考力を奪い、精神の自由を奪い、繰り返し繰り返し使命観を与え、選ばれた選民意識を植え付け、身近な人間を敵と見做して攻撃する思考を与え続けられれば、不特定多数の若者に対して生きる喜び、人生に対する使命観を与える事になろう。こうした長期間のマインド、コントロールに洗脳されなかった不幸な魂のみを対象にイエスの説く福音、「荒れ野での試み」の説法は有効である。

奇跡と復活という神秘的な権威によって弱い人間の魂に対して絶対的な権威を与えるべきであったイエスは、一般大衆の魂に対する過大なる評価から個人の自由な意志で人生を生きるべきであると教えた。茫漠たる人生の時間の流れの中で、自己の良心を尖鋭化し、自由な意志によって一人で生きていけと教えた。こうして尖鋭化した自由な良心を背後に於いて支えるのは、地上に於いてその肉体を喪失した神の子イエスの言葉のみなのである。

「あなたの神、主を試みてはならない」

なんという残酷であろうか、最終的にイエスが愛したのは、国家社会主義あるいは共産主義、戦後盛んになった新興宗教の激しいマインド、コントロールに洗脳され得なかった選ばれた少数の精神と肉体の頑強な特殊な戦士だけということなのである。

全ての人間を愛したはずのイエスが、何故に結果的に多くの大衆を見捨て少数の特殊な人間のみを愛する結果になったのか、それは若い夢想家のイエスが人生を知らず、人間を知らず、社会を知らず、女を知らなかったからとしか言い様がない。

無限の時間の中で魂を尖鋭化し、空虚に耐えよと教えるイエスに答えるべく、自己の良心のままに生き続ける者を背後で見守っているのは、肉体を喪失したイエスの力のない微笑だけというのは、人間の魂は救われない。

(4)

悪魔との問答の第三は、「なんぢ若し平伏して我を拝せば、此等を皆なんぢに与へん」

『サタンよ、退け「主なる汝の神を拝し、ただ之にのみ事へ奉るべし」と録されたるなり』

イエスは、悪魔の勧める地上の国々の権力を受け取る事を拒否した。夢想家の青年であったイエスは、人間の生活が何であるかを知らず、多数の無知文盲の大衆を組織的に生活に於いて向上させるべき帝国の建設に就いて最初からそうした野心を持たなかった。

全ては女を知らず、家庭を持つこと無く結果として生活そのものを知らなかった一人の若い夢想家、浪漫主義者の失敗である。

イエスの退けた悪魔の忠告の第一、第二、第三を忠実に実行したのが大審官である。

物欲を肯定する事で人間を服従させ、奇跡と復活の神秘で人間を畏怖させ、地上の権力と結び付く事でイエスに出来なかった広範な大衆の統治に成功したのである。すなわちローマ、カトリック教会の頂点に立つ法王、大審問官はイエスの代理人ではなくて、荒野に於いてイエスに退けられた悪魔の代理人なのである。大審問官は、悪魔の誘惑の一つ、一つを忠実に実行するのに常に愛の福音を説いたイエスの名に於いてそれを実行した。イエスの代理人として世界中に教会を建立したペテロとその後継者たちは、設立当初から教会の内部に悪魔の精神を宿していたと言える。ローマ、カトリック教会は、表面上はイエスの精神を装いながら、教会統治機構の内部はイエスに拒否された悪魔の精神を宿しており、世界に君臨する教会

は、悪魔がイエスに進呈しようとして拒否された「世のもろもろの国と、その栄華」の具体的な姿なのである。

芥川龍之介が「西方の人」を執筆するに於いて参照したものに「イエス伝」(ルナン)、「基督の生涯」(パピニ)、「獄中記」(オスカー、ワイルド)などが知られているが、「カラマゾフの兄弟」のなかのイワン、カラマゾフの作中劇「大審問官」の影響を強く受けている事は確かである。「西方の人」は、既存の教会の統治機構に対しては全編批判的であり、作品全体は荒野で悪魔の誘惑を退けたイエスの立場で貫かれているからである。「…が、キリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、—その又キリストの名もとに横暴を振ふことは変らなかつた。キリストの後に生れたキリストたちの彼の敵になったのはこの為である。…」(35復活)

芥川の視線は、「西方の人」執筆に際して参照した「元訳聖書」(「明治訳聖書」近代文学館所蔵)の内部に強烈な映像を持っているイエスの姿に自己の人生のイメージを重ねた為、信仰を組織化した教会制度に対しては無関心あるいは冷淡、あるいは批判的である。それは新訳聖書のイエスに直接肉薄した結果そうなったのか、あるいは「カラマゾフの兄弟」(「大審問官」)の影響によるものか判断し難い。

「キリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。(神に会はなかつたキリストの悪夢に会ったことは考へられない。)」(20エホバ)

悪魔との具体的な交渉に於いて神の存在を認識する芥川の視線は、漠然とした新訳聖書の読解の内部にイエスを求めたのではなくて、背後に「カラマゾフの兄弟」(「大審問官」)の強烈な読書体験があったように思える。「…汝らの仇を愛し、汝らを買むる者のために祈れ」(マタイ5-44)とイエスは愛の福音を説いた。この広大な人類愛の裏側には悪魔が潜んでいる。

策略、謀略、陰謀、密告によって20世紀に惨禍をもたらした国家社会主義、共産主義は神の属性である。光と影が一体となった神の福音が最初に日本にもたらされたのは、16世紀の後半であり、無数のドラマを生んだ結果、当時の日本人の倫理と理性の範囲で打ち倒されて終息した。当時のキ

リシタン管区長ヘレイラ神父は、転向の後に沢野忠庵と名のって「頭偽録」を書いた。（「頭偽録」は遠藤周作の「沈黙」の素材となった。）

作品「沈黙」の作品内部に於いて敵役を演じている宗門改めの井上筑後守は合理的な方法でキリストの復活や奇跡を否定した。（彼は青年時代、キリスト教の信徒であった。）

姉崎正治「切支丹宗門の迫害と潜伏」には、日本人の理性である井上筑後守がいかにバテレンの教義と信仰に対して抵抗を示したかを記述している。

バテレンのイデオロギーの浸透に対して日本人の精神の静謐を守る為に果敢に戦いを挑んだ井上筑後守を視野に入れたもう一つの「沈黙」が、書かれる必要があるだろう。ヘレイラが考案したと言われている「踏絵」は、今日から考察すれば当時の日本人の精神生活を過激なイデオロギーから守る為の卓抜なアイデアであったと考察しないではいられない。

今年8月（平成7年）、私は長崎市を訪れて市内観光で西坂26聖人殉教地に立った。案内の美しいガイド嬢は、当時の権力の為に磔刑となったスペイン人修道者と日本人信徒の犠牲的な行為に対して好意的な解説を付け加えて哀悼の意を示したが、私は日本国内に浸透する過激なイデオロギーから日本人の精神を守る為に当時の権力者が示した容赦の無い決断に対して賛同しないではいられなかった。

明治に入って日本社会に浸透してきたのは、かつての過激なバテレンの教義を喪失し、温和な教義宗教として装いを新たにしたプロテスタントの教えである。

ところで日本人の精神史に於いて特筆すべきは、昭和に入ってから新たなイデオロギーの侵入である。共産主義の理論と実践の導入である。日本人の精神を破壊する為の、この新しいイデオロギーの防波堤の役割をはたしたのが治安維持法である。

踏絵と治安維持法によって日本人は、歴史上二度にわたり精神史の危機を回避したと言えるだろう。しかし今日、踏絵と治安維持法の犠牲者は悪しき時代の象徴として広く日本人全体の哀惜を受けている。おそらくは敗退して消えていった者に

対する日本人固有の素朴なセンチメンタリズムであろう。

(5)

「西方の人」の記述に於いて、ヘロデもピラトも素っ気なく記述され、芥川がこの二人の人物に興味を払った形跡は無い。二人に対する芥川の理解は、一般的な聖書の記述の内部にある。ヘロデは残虐にそしてピラトは、温和な横顔を見せている。

「ヘロデは或大きい機会だった。かう云ふ機械は暴力により、多少の手数を省く為にいつも我々には必要である。彼はキリストを恐れる為にベツレヘムの幼な児を皆殺しにした。…」(12「悪魔」)
「ピラトはキリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。

後代も亦この官吏に伝説的色彩を与へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはかう云う色彩に欺かれなかった。」(30「ピラト」)

先に(12「悪魔」)を引用して大正作家としての芥川の限界に就いて考察したが、ヘロデとピラトの把握に於いても芥川の思考が、一般的な聖書の記述の範囲にあり、新訳聖書の記述の重大な側面に注意を払っておらず、過去の作家としての時代的な制約を露呈している事を竹山道雄の著述と引き比べて考察して見たい。

20世紀最大の悲劇、国家社会主義、共産主義の犠牲者は、数千万人を超え、これらの犠牲者を生んだ妄想の理論的な根拠は、新訳聖書の記述の内部にあることを竹山道雄は、その著述に於いて繰り返して記述した。「続ヨーロッパの旅」(「妄想とその犠牲」新潮社 昭和34、3)、「乱世の中から」(「ゴットの最初の愛」読売新聞社 昭和49、2)、「剣と十字架」(「ドイツの旅より」文芸春秋 昭和38、2)「…その血は、我らと我らの子孫とに帰すべし」(マタイ27-25)、ローマ総督ピラトを前にしてのユダヤの民衆の叫びは、ローマ帝国のコンスタンチヌス帝がキリスト教を帝国の国教に容認した瞬間から新たな意味を持ち、別の局面に直面する。つまりユダヤ人が「ゴット殺し」の主犯としての宿命を帯びる事になったのである。

キリスト教をその母体であるユダヤ民族から切り離し、ユダヤ民族受難の歴史を作ったのは、パウロとアウグスチヌスである。四人の福音書の作者は、ユダヤの代官ヘロデの残酷な事は記述しても、ローマ総督ピラトの「ゴッド殺し」に就いては、その責任を追及していない。福音書の記述内容も時代を経るにつれて総督ピラトは、ますます迫害者としての横顔を失い、運命の子としての立場を失っている。

四人の福音書伝記作者のこうしたヘロデとピラトの記述の相違について芥川龍之介は、最後まで気付く事なく、正統的な新訳聖書の理解の範囲での認識を示しているのである。

(ヘロデに就いての記述は、マタイ2-1…2-23、ピラトに就いての記述は、マタイ27-11…27-26、マルコ15-1…15-15、ルカ23-1…23-25、ヨハネ18-28…19-16)

イエスの生誕から百年の後に成立した最も新しいヨハネ福音書は、実在のイエスからは最も速く、ピラトはユダヤの群衆に押し切られて、しぶしぶイエスの磔刑に同意する気弱な権力者の横顔を見せている。ヨハネ福音書に於いて「ゴッド殺し」のユダヤ人の印象は強烈であり、イエスの実在は、その生活圏の母体であったユダヤの民衆の内部から遊離して独立し、人々の誤りを許し回心を求める存在から、人々の眼前に君臨する権威としてのイエスに変貌している。

人間を善と悪、光と影の二元論で把握し、地上の全てを神と悪魔の属性として理解する、そして

20世紀の国家社会主義、共産主義に影響を与え、反ユダヤ思想を助長したのは、共観福音書よりもこのヨハネ福音書が第一のようである。

芥川龍之介が、「西方の人」執筆に於いて使用した聖書は、「元訳聖書」「英文聖書」「改訳聖書」の3冊であり、近代文学館所蔵の前二冊には芥川の傍線箇所を現在に残しているもののピラトに就いての問題の箇所に注意を払った形跡は、現在まったく伺う事が出来ない。芥川の作家としての思考は、教義や教会史に就いて及ぶ事が無く、徹頭徹尾イエス・キリストの私生活とその人生のサイクルに限定されているのである。

明治の青年の心をとらえたキリスト教は、人道主義的な教養宗教の色合いが強く、当時内部生命を失っていた既存の宗教に代わって多くの人々の心をとらえた。理想主義のビジョンと合体して来るべき未来の象徴のように把握され、明治時代隆盛を極めたプロテスタントの教えは、戦後日本社会に於いて流行したカトリックと同じように当時の日本人にとって新鮮な倫理感となったのである。明治末年芥川が接したキリスト教は、こうした極度に醇化され新生日本人の新しい倫理感となったキリスト教であり、教養主義の臭いの強いものであった。

すでに考察した如く「悪魔」や「ピラト」の記述に於いて、芥川の視点から重要な問題点が抜け落ちている事に就いて指摘したが、その理由は多く時代的な制約に帰するであろう。